

第Ⅲ章 まとめ

ここでは今回の調査の中心となった弥生時代の調査成果を記述することでまとめとしたい。

竪穴建物について 今回の調査では弥生時代の竪穴建物は11軒検出された。この中で出土遺物から時期が明らかなものは中期末から後期初頭に位置づけられ比較的短期間に収まる。第Ⅱ章でも記述したが、本来標高が高かった場所は削平を受けているため、滅失しているという可能性は残るもの、詳細な時期が明らかでない竪穴建物74を除くと、北側に所在する竪穴建物72、竪穴建物82は何れも間仕切りを有する。一方、南側に所在する竪穴建物は何れも方形基調である。また、詳細な時期比定に足る遺物が出土していない建物もあるが、北側の間仕切りを有する建物は中期末、南側の方形基調の竪穴建物は中期末から後期初頭と僅かながら時期差も想定される。集落内での住み分けなのか、時期による居住域の移動であるのかは、今後周辺での発掘調査成果が蓄積した段階で再度検討する必要がある。

竪穴建物17の炉跡について 竪穴建物17では建物の東に偏った位置から炉跡が検出されている。炉跡は浅い掘り込みを持ち、掘り込み内には焼土層と炭化物を多量に含む砂層の互層が堆積していた。掘り込みの北側は強い被熱により赤化し硬質になっている。竪穴建物17から出土した遺物を見ると、鉄器、鉄片は出土していないが、被熱した粘土塊、砥石、敲石、磨石、被熱した台石（写真のみ掲載）が出土している。鉄器製作遺構の要件として禰宜田氏は、(1) 竪穴建物の床面に焼土面を有する、(2) 台石、敲石、磨石類、砥石などの石製鍛冶具、(3) さまざまな形態の鉄製品、あるいは鉄片、(4) 焼粘土塊を挙げている（禰宜田2020）。竪穴建物17はこれらのうち(3)を欠くため積極的に鉄器製作遺構であったとは断定できないが、その可能性がある事例として考えたい。仮に鍛冶炉であった場合、浅い掘り込みを有するものの、カーボンベッドが確認できなかったため、建物床面をそのまま炉床とする村上氏の分類のⅣ類に該当すると思われる（村上2007）。

周溝状遺構について 今回発掘調査では3基の周溝状遺構が検出された。削平や調査区外に広がっていたため全形が確認できた事例はないが、想定される平面形は円形と隅丸方形がある。残存状況が悪いものの隅丸方形を呈する周溝状遺構83、85は検出状況から周溝が途切れている可能性が高い。また、円形を呈する周溝状遺構81では周溝中央の最下層が硬化している状況が確認された。硬化した層である3層は、周溝の壁や周囲の地山から周溝内に流れ込んだと考えられる4層が堆積した後に堆積している。通常であれば3層の堆積までに一定の期間を想定すべきであるが、砂丘上に立地する当該地では、4層程度の堆積であれば数時間で堆積することが調査中に明らかになっている。そのため周溝掘削後に時間をおかず、底面を均すために敷設された層である可能性も想定できる。この硬化した層以外には埋葬施設や建物の痕跡、祭祀遺物等の出土も無く、中ノ原第2遺跡における周溝状遺構の性格は不明と言わざるを得ない。

瀬戸内系の土器について 今回の調査では瀬戸内系の土器が一定量出土した。弥生時代中期から後期に南部九州、特に宮崎平野部から多数の瀬戸内系の土器が出土することは古くから知られており、近年では特に河野氏によって詳細な検討がなされている（河野2011a、2011b）。本来はそれに従い、胎土も考慮したうえで、搬入土器、模倣土器、折衷土器に分類すべきである

が今回はそこまで至れなかった。本遺跡からは甕、(鉢)、壺、高坏、器台と多様な器種が出土しており、瀬戸内系の中でも細かく見ていくと、高坏については器形や透かし孔が円形であることから東部瀬戸内系が主体と考えられ、頸部が長い広口壺(63)や口縁部に凹線文を施す小型の直口壺(141、190)も東部瀬戸内で散見される器形である。ここから中ノ原第2遺跡では東部瀬戸内地域との交流が主体であったと考えられる。一方、中ノ原第2遺跡に近接する本村遺跡からは、工事中の採集資料ではあるが伊予系高坏が出土している。本村遺跡の資料は中期後葉から末葉に位置づけられ、中ノ原第2遺跡出土資料よりも若干遡る時期のものである。時期による傾向については、河野氏が中期中葉から末葉は伊予系が主体で、後期初頭から中葉は伊予系に加え東部瀬戸内系のものが増加することを指摘しており、中ノ原第2遺跡で東部瀬戸内系が主体となることはこの傾向を反映したものと考えられる。

打製石鏃について 中ノ原第2遺跡では6点の打製石鏃が出土した。当遺跡では縄文時代の遺構、遺物が確認されていないため弥生時代に帰属することは明らかである。この中で凸基式、有茎式の大型の石鏃に関しては全て安山岩製であり、素材、製作技法の両面から搬入品であると考えられる。一方、縄文時代からの伝統的な打製石鏃の形態を引く2点はチャート製である。おわりに 中ノ原第2遺跡では、瀬戸内系土器以外にも、須玖式の壺や豊後系の壺、黒髮式の鉢、近畿系もしくは東部瀬戸内系の垂下口縁高坏といった各地域の土器、製作地は明らかではないが搬入品の水晶製算盤玉、搬入品の安山岩製の打製石鏃が出土した。これらのことから中ノ原第2遺跡を営んだ人々は、瀬戸内地域をはじめ多くの地域と交流をもった集団であると考えられ、その集落である中ノ原第2遺跡は交流の中心となる拠点的集落といえる。しかし集落の継続期間をみると中期末から後期初頭が中心であり比較的短期間の内に終息する。この点については、今回は集落の一部を調査したのみであり未調査部分に異なる時期の遺構が存在する可能性がある。また、本来は近接する本村遺跡も同一集団の集落と考えてよい位置にあるほか、周辺の遺跡も未調査のものばかりであることから、複数の弥生時代集落が存在する可能性もある。今後の周辺の調査事例を待つほかないが、本来は河野氏が学園都市遺跡群で想定したように、「比較的小規模な集団単位が一定の地理範囲内に複数存在し、それらが少しずつ場所を移動しながら集落が展開する」(河野 2015)という状況が砂丘上でも展開していたのではなかろうか。

【主要参考文献】

- 大賀克彦 2011 「弥生時代における玉類の生産と流通」『弥生時代』上、講座日本の考古学5、青木書店。
- 河野裕次 2011a 「南部九州における弥生時代瀬戸内系土器の基礎研究」『地域政策科学研究』第8号。
- 河野裕次 2011b 「南部九州における弥生時代瀬戸内系土器の動態」『日向における弥生文化の謎』宮崎県立西都原考古博物館。
- 河野裕次 2015 「宮崎平野南部における弥生集落の様相」『Archaeology from the South III』本田道輝先生退職記念事業会。
- 谷澤亜里 2020 「玉類からみた日韓交渉—弥生時代前期後半～後期を中心にして—」『新・日韓交渉の考古学—弥生時代—』
- 「新・日韓交渉の考古学—弥生時代—」研究会、「新・韓日交渉の考古学—青銅器～原三国時代—」研究会。
- 禰宜田佳男 2020 「近畿における鉄器製作遺跡の「再発掘」」『新・日韓交渉の考古学—弥生時代—』
- 「新・日韓交渉の考古学—弥生時代—」研究会、「新・韓日交渉の考古学—青銅器～原三国時代—」研究会。
- 村上恭通 2007 『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店。